

中央東

第 56 号
令和6年12月2日



親
心

副支部長 桑 原 通 泰

(上山中 平元年度)

私は幼くして弟を亡くしています。もう50年も前の話です。夏休みの初日、水の事故でした。教師という職業を選んできて、長期休みに入るとき、いつも不安になります。ゴールデンウィーク、夏休み、冬休み、春休み。この休みを心から楽しみに、わくわくして待っている子どもたち。今年こそ、その大切な命が犠牲になるような事件事故が日本のどこからも報道されない日々であってほしいと思います。同時にそれが難しいということも理解していて、せめて自分が関わる子どもたちが元氣

で休み明けに再会できるように祈っています。

近年、最新と言われるニュースはめまぐるしく入れ替わり、あつという間に上書きされていきます。同時に人は忘れる動物でもあり、つらいこと、悲しいことも忘れることで前を向いて生きていけるものだと思います。

今年の夏、もう少しで夏休みも終わろうかという頃に九州で起きた事故の報道がありました。母親の運転する車がバスと正面衝突し、後部座席に乗っていた幼い姉妹が命を落としました。

た。シートベルトの適切な着用と共に全国に報道されました。弟を失った私の両親の悲しみは筆舌に尽くしがたく、幼かった私も声をかけることをはばかられる日々であったことを覚えています。

人は忘れる動物です。でも、決して忘れることのできない悲しみを抱えて生きていかななくてはいけない人生があるとしたら、自分を責め続け、決して許すことも許されることもない人生があるとしたら…… それはどんなにつらい日々なのでしょう。

九州での事故は第三者の私たちにとってはすでに過去の出来事になりつつあります。でも、あのお母さんにとっては「今」であり、その「今」はずっと永遠に続いていきます。

数年前、他界した父は晩年、「やつと弟のところへ行ける……」と、よく病院のベッドで話していました。親にとって子の存在はかけがえのない宝物です。風邪を引いたり、小さなけがをしたり、アレルギーが見つかったり……そのたび親は自分がああしていれば、あるとき

こうしていたらと、後悔の念と共に自分を責めます。でも、時にはその責任を他に求めたくなるときもあるのではないでしょう

うか。以前、夜回り先生で有名な水谷治先生のお話を聞いたとき、ずっと親は敵だと思っていたとおっしゃっていました。しかし、その後、多くの子どもたち、親と接することで親もまた、苦しみ悩み続けているということに気づいたとおっしゃっていました。

今、教師はブラックと言われる、つらいことも多いと思います。保護者対応もその一つです。でも、私たち教師と同じように保護者も子どもたちの笑顔を願う気持ちは一緒なのではないでしょうか。しかし、願う気持ちがあってもどうしていいかわからず、責任を感じながらつらい日々を送っているのかもしれない。

私たちはプロの教師です。保護者の心に共鳴し、子どもの笑顔を追いつめる続けるプロでありたいと思っています。